

※ 解答は、《解答欄》に書きなさい。

ポイント

- ・ 文学的文章における描写の効果を捉え、内容の理解に役立てる。
- ・ 文章に表れているものの見方について、知識や体験と関連付けて考える。

次は、山手さんが読書会で読んだ文章と夏休みに書いたノートです。これらを読んで、あとの問いに答えなさい。

【読書会で読んだ文章】

「触るんじやないぞ。」

父が言った。

白い開襟シャツを着た父の腕に抱えられ、ぼくと、一つ違いの弟は後ずさった。父の右手の古い懐中電灯が的外れな場所を照らした。昼間の熱をまだ少しため込んだ庭はすっかり暗くなり、心地よい夜風が頬をなで始めていた。

勤め人だった父は、夕食前の散水を日課にしていた。帰宅した父が、その足で庭に行くと、母とぼくたちの夕餉の支度は決まってペースアツプした。

「おい、来てみる。」

いつも一人で水をやる父が、今日は珍しくぼくたちを呼んだ。父は、靴箱の上に置いてあつた懐中電灯を手にしてた。ぼくたちは、急いで庭に出た。

庭には、あまり背の高くないサクラの木があつた。懐中電灯の明かりは、父の足下からサクラの枝へと素早く移り、そこからゆつくりと、時計回りに降りてきた。そして、木の幹の中ほどを照らして止まった。光に導かれ、忙しく動いたぼくの目は、見慣れているようで、見たことのない虫を捉えた。

「セミの幼虫？」

よく知っているセミの抜け殻そのものの大きさと形だが、薄茶色の乾いた物体とは違つ、しつとりとして肉感のある生き物が一匹、そこにいた。——これが、父が話していた、何年も土の中で暮らすというセミの幼虫だ。

「そらだ。今から羽化が始まるぞ。」

「何？ 羽化つて。」

父の顔を振り返りながら、弟が聞いた。

「セミが出てくるんだ、この中から。」

「えつ、どうやって出るの？」

弟は、今度は前を向いたまま聞いた。

「見てたら分かる。ほら、もう背中が割れかけてるだろ。」

見ると、幼虫の頭から背中にかけて、一本の線が入つてた。ざらついたサクラの幹をしかと捕らえた前肢は、他の肢よりも太くがつしりとしてた。ぼくは、一本の前肢に力を込めれば、背中が一気に裂けるのではないかと期待した。

けれども、幼虫は、しばらくは幼虫のままだった。

「あつ。」

ぼくと弟は、そろつて「あつ。」と言つた。(※【二ページ】に続く。)

シート 8 正答例

- 1 ③
- 2 ウ
- 3 うすう///と
- 4 みずみずしく
- 5 (例) 作りたてのからく細工 (10 字)